

1) 矢羽田朋子「新京の都市計画及び建築から見た建国大学」

現在、満洲国の最高学府となるべく創設された建国大学についての回想録は多いが、先行研究は決して多いとは言い切れない状況である。本報告では、満洲国の国都（新京）建設計画の面から、また当時の新京市街地図と現在の長春地図を用いることによって、建国大学とその他市内の大学との位置関係等について比較を行い、建国大学の位置・建物等に他の大学には見られない特徴がないかを探っていきたいと考えている。

2) 張景珊「曹禺の作品における女性像」

曹禺作品の女性像に関する分析手法は、中華民国時期、毛沢東時期、改革開放時期の変遷にともなって、大きく変化している。特に、1980年代以降に中国女性学が誕生して以来、フェミニズムやジェンダーの視点で、その女性意識を研究する方法が顕著になっている。しかし、この視点を検討するためには、まず清末から民国に至る中国女性解放史の研究成果を明らかにし、その比較分析から現代的ジェンダー論の有効性を検証しなければならない。

従って今回の報告では、まず曹禺の作品における女性主義に関する分析の問題意識を提出し、そして中国近代「女権」運動を明らかにし、さらに作品「雷雨」の女性像・繁漪をケースとしてとり上げ、その女性アイデンティティを分析する。

3) 小崎太一「『郭沫若少年詩稿』に見る李商隱の影響」

郭沫若は『唐詩三百首』等で古典詩を学んだが、日本留学前の『郭沫若少年詩稿』の以下の詩は晩唐の李商隱の詩を利用した可能性がある：郭の「舟中聞雁哭吳君耦逃 四」が李の「錦琴」を、「錦里逢毛大酔後口号 一」が「夜雨寄北」を、「同 三」が「無題（颯颯東風）」を、「寄先夫愚 五」が「夜雨寄北」を。その後李の影響が何故ないのか、李を介した欧州世紀末文学との共鳴など、郭文学の李との関係から浮かぶ問題を考察する。

4) 松岡純子「許地山『綴網勞蛛』(1922)について——東南アジアにおける基督教の視点から」

「綴網勞蛛」(『小説月報』13-2 1922)は、女性主人公・尚潔(東南アジアの華僑社会で生きる基督教徒、元・童養媳)の教会からの追放・苦難・堅忍・帰還の物語である。

彼女の追放は、夫による妻の貞節への疑惑と誤解および教会での告発が、もたらしたものである。しかし、彼女自身が、夫や周囲からの非難に全く抗弁せず(即ち自己の潔白・正当性を主張せず)、自らその地を離れる選択をした結果でもある。

追放によって悲嘆にくれたり、自己の正当性を主張して相手や周囲を責めることなく、淡々と身を処すこの女性を通して、許地山は何を伝えようと意図したのだろうか？

5) 新谷秀明「〈阿姨〉(家政婦)のいる風景 ——王安憶の小説より」

中国語では〈阿姨〉、日本語では家政婦、お手伝いさん等と称される職業女性は、古来より形を変えながら現在なお我々の社会に存在する。家庭小説に登場する〈阿姨〉は、家族とは他人でありながら「家庭の秘密を覗き見る」特権を与えられる特殊な存在であることから、時として小説の重要な役回りとなる。日本近代文学における〈女中〉の描かれ方を参照させながら、王安憶のいくつかの作品を題材に、〈阿姨〉が小説の中でどのような役割をもつのかを考えたい。

6) 真殿仁美「障害のある当事者の権利擁護と障害者聯合会のかかわり」

中国は2008年に国連の条約である「障害者の権利条約」を批准した。条約の内容を国内においてどのように具現化していくのか、注目される場所である。本報告では、条約の条文にもある障害者の権利擁護について、障害者聯合会が障害のある当事者の権利擁護をどのような視点から捉えているのか、という点に絞り考察を行なう。結果として、当事者の権利擁護を推進していく上で、従来どおりの聯合会の姿勢では難しいことを指摘した。

7) 横澤泰夫「普世価値論争について」

普世価値とは最近の中国の政治用語としては、人類或いは世界的に普遍的で共通な価値としての民主、自由、人権などを指している。中国ではこのところこの普世価値をめぐる議論が盛んだ。論争の一方は普世価値を肯定するいわゆる民主人士などと言われる人たちである。もう一方はこれとは立場を異にする党政の指導者、党内イデオログたちである。報告では、今なぜ普世価値観論争なのかを導入として、双方の論点を整理して紹介し、これに関連して中国政治の今後についても簡単に展望する。